

「お吉殺しの場」(『女殺油地獄』)の修辞学的分析 —説得力をコントロールする修辞技法—

柳 沢 浩 哉

1

修辞学的分析 (rhetorical analysis) とは、レトリックの蓄積を利用してテキストを分析する方法である。ただし、この方法の最大の特徴はその分析方法ではなく分析の目的にある。テキスト分析のほとんどがその目的を理解過程の解明に置いているのに対して、修辞学的分析では表現効果あるいは説得効果の解明を目的とする。これはレトリックが効果的な表現、説得力のある表現の作成を課題としていたことから必然的に導かれる目的であり、特に説得効果を計算して作られた文章の分析に有効である。言うまでもなくレトリックはヨーロッパ諸語を前提として開発された技術体系であるが、レトリックが主な研究対象を言語の発想レベルに置いていたため、そこでの蓄積には言語を越えた普遍性がある。本稿は、近松門左衛門の『女殺油地獄』の中の「お吉殺しの場」を事例にこの分析を試みる。

近松は筋書きの必要に応じて、各せりふがもつ説得力の強弱を自在にコントロールできた作家である。彼はさまざまな修辞技法を駆使することで説得力の強弱をコントロールしているが、彼が使った方法はそのほとんどがレトリックの蓄積から説明可能である。彼の選択した技法およびその用法が、レトリックの定石に合致した「自然な」ものだからである。この事実がレトリックの普遍性の証であることは言うまでもないが、それ以上に、近松の修辞技法に対する感覚の鋭さ、さらにそれを道具として使いこなせる能力の高さに、脚本家としての近松の非凡な才能を改めて実感させられる。本稿では「お吉殺しの場」の中の徳兵衛とお澤の三つのせりふを対象に、どのような方法によって各せりふの説得力がコントロールされているかを詳しく分析していく。本稿の分析によって近松の修辞技法の緻密さ普遍性ととともに、修辞学的分析という方法の普遍性と有効性の一端を示すことができるものと思う。

2

本稿で対象とするせりふの登場する場面を簡単に紹介したい。油屋河内屋の次男与兵衛は手のつけられない放蕩息子であるが、番頭上りの養父徳兵衛は与兵衛に何かと甘

く、勘当した後も、懇意にしている油屋豊島屋のお吉に頼み、与兵衛に渡してくれと金を預ける。一方、与兵衛の実母（徳兵衛の妻）お澤は日ごろから与兵衛に厳しく、徳兵衛の甘い態度にも批判的である。豊島屋で偶然徳兵衛と出会ったお澤は、徳兵衛が与兵衛に金を渡そうとしていたことに気づき強い調子で徳兵衛の甘さをなじる。しかし、その直後、お澤の懐から五百文の銭がこぼれ落ち、お澤も実は与兵衛への金をお吉に託そうとしていたことがばれてしまう。お澤は涙にくれながら、徳兵衛にわびるとともに与兵衛を思う本心を告白する。この時、お澤と徳兵衛の間に交わされた次の連続する三つのせりふを本稿では分析対象とする¹⁾。

(A)：お澤が徳兵衛の甘さをなじるせりふ。

(B)：なじられた徳兵衛がお澤の厳しさをたしなめ、自分の心情を語るせりふ。

(C)：徳兵衛を偽っていたこと、店の金を与兵衛のために盗んだことをわびるとともに、与兵衛に対する本心を告白するお澤のせりふ。

この三つを分析対象に選んだのは、これらのせりふが説得力のコントロールという点に特に配慮されたせりふであり、説得力をコントロールするさまざまな修辭的技法を観察できるからである。作品の中で(A) (B) (C)は地の文をはさんで並んでいるが、紙幅の関係から地の文は省略してそれぞれを下に引用する。

(A) ナウ徳兵衛殿七左衛門様もお留主といひ。内の事はそこそこに。何時逢はうとままの向ひどし。互に忙しい際の夜さ。爰へは何の用が有る悪性する年でもなし。ムウ又与兵衛めが事悔みにか。いかに継(ま)しい子なればとてあんまりに義理過ぎた。真実の母が追出すからは。此方(こなた)の名の立つことはない。此の三百の銭のらめに遣るのか。常づねに身をひづめ。始末してあいつに遣るは淵へ捨つるも同然。其の甘やかしが皆毒飼(どくがひ)。此の母はさうでない。サア勘当といふ一言口を出るがそれ限り。紙子着て川へはまらうが。油塗って火にくばらうが。うぬが三味。悪人めに気を奪はれ。女房や娘は何になれ。サアサア先に往なしゃれと。

(B) エ唄(か)か酷いぞやさうでない。生立(うまれだち)から親はない。子が年寄っては親と成る。親の始めは皆人の子。子は親の慈悲で立つ親は我が子の孝で立つ。此の徳兵衛は果報少く今生で人は使はずとも。何時でも相果てし時の葬礼には。他人の野送り百人より。兄弟の男子に先輿(ごし)跡輿舁(か)かれて。天晴れ死光りやらうと思うたに。子は有りながら其の甲斐なく無縁の手に掛らうより。いっそ行倒れの釈迦荷(にな)ひが。ましておじやるはと又噎(むせ)。返るぞ哀れなる。

(C) なう情なや恥しと我が身を掩(おほ)ひ押隠し声を上げ。徳兵衛殿真平(まっぴら)許して下され。是は内の掛(かけ)の寄与兵衛めに遣りたいばかり。わしが

五百盗んだ。廿年添ふ中隔心（きやくしん）隔ての有るやうに情ない。たとへあの悪人めお談義に聞くやうな。周利槃特（しゆりはんどく）の阿呆でも阿闍世太子（あじやせたいし）の鬼子でも。母の身でなんの憎からう。いかなる悪業悪縁が胎内に宿ってあの通りと思へば。不便さ可愛さは父親（てておや）の一倍なれども。母が可愛い顔しては隔てた心に。あんまり母があいだてないかうばりが強うて。いよいよ心が直らぬとさぞ憎まるは必定と。わざと憎い顔して打（ぶ）つつ叩いつ追出すの勘当のと。酷（むご）う辛（つら）う当りしは継父（ままたて）の此方（こなた）に。可愛がって貰ひたさ。是も女の廻り知恵許して下され徳兵衛殿。わしに隠してあの銭を遣って下さる心ざし。詞ではけんけんと慳貪（けんどん）にいうたれど。心で三度戴きし。何を隠さうあいつは立派好きもする奴。取分（とりわけ）祝月鬢附（びんつけ）元結（もとひ）を調（ととの）へ。人交りもしたからう。生まれて此の方節句節句祝儀欠かぬに此の月ばかり。身祝ひもして遣りたさ。見苦しい此の恥辱を晒（さら）すも。お吉様に頼んで届けんため。まだ此の上に根性の直る薬には。母が生胆を煎じて飲ませといふ医者あらば。身を八裂も厭はねども。一生夫の銭金文字ひらなかな違へぬ身が。子故の闇に迷はされ盗してあらわれた。恥しゅうござるとばかりにてわっと叫入りければ。

与兵衛に対してこれまで実母のお澤は厳しく接し、与兵衛に対する徳兵衛の甘さに対しても批判的であった。しかし、与兵衛に対する愛情は、実はお澤の方が遥かに深く、与兵衛に対するこれまでの厳しさは、養父である夫に与兵衛を「可愛がって貰ひたさ」ゆえの苦悩の「演技」だったのである。実の母としての苦悩と愛情を、お澤は(C)で涙ながらに訴える。お澤の愛情の深さと思慮が観客の涙をさそう、この作品の中でも見せ場の一つとなるせりふである。この見せ場を成功させるために、(C)ではお澤の愛情の深さが最大限に表現されることが要求される。そして近松はこの要求を二つの方法によって実行している。一つは、(C)を修辭的に練り上げること。もう一つは、それ以前の(A) (B)との説得力の格差を利用して、(C)の説得力をより大きく見せる方法である。これら三者の説得力の強さを簡単に比較すれば次のようになる。(話者を括弧で示す。)

A : B : C = 中 : 小 : 大 (お澤 : 徳兵衛 : お澤)

説得力がこのような関係で配される背景を説明したい。(B)は与兵衛に対する徳兵衛の心情を表現したせりふ、(C)は与兵衛に対するお澤の思いを表現したせりふである。見かけとは裏腹に、徳兵衛よりもお澤の愛情がまさっていたという事実がこの場面の中心的内容であるから、(B) (C)間では説得力に最大の格差が要求される。しかも(B) (C)は近接しているので、両者には明瞭なコントラストがなくてはならない。ここから B : C = 小 : 大の関係が導かれる。次に(A)と(C)の関係を考えてみよう。(C)がお澤の本心、(A)は本心を偽った演技のせりふであるから、A : C = 小 : 大の関係は明らかである。ただし、(C)に

対する(A)と(B)の関係は同等ではない。(A) (C)間には極端な説得力の格差が作れないからである。お澤は(C)において与兵衛に対する本心を初めて披露する。このせりふでは、与兵衛に対する愛情が深いというだけでなく、彼女の本心の意外性、すなわち本心とそれまでの「演技」との隔たりの大きさが命となっている。この隔たり大きさがそのまま彼女の苦痛の大きさだからである。そして、その隔たりを確保するためには(A)において彼女の厳しさ・冷たさが強く表現されなければならない、(A)では(B)のように極端に説得力を弱めることは出来ない。ここから、A, B, Cを一つにまとめると上のような関係が導かれることとなる。近松はこの関係を実現するために、多様な修辞技法を組み合わせ、説得力の調整を行っている。以下、その方法を見たい。

3

三つのせりふの中で最も特異なのは(B)である。(B)には弱い説得力しか要求されていないことを上述したから、これが特異であることに意外な印象を受けるかもしれないが、(B)では上述の条件を満たすために、説得力を弱める方法が実行されている。説得力を弱めるという通常とは逆の方法がこのせりふを特異なものとしているのである。

徳兵衛が与兵衛にこっそり金を渡そうとしたことを、妻のお澤は強い調子で非難する。(B)はその非難に対する反論ないし弁明であり「エ唄(かか) 酷いぞやさうでない。」で始まる。しかし、(B)をお澤に対する反論あるいは弁明と考えると(B)には奇妙な点があることに気づく。(B)において徳兵衛は、弁明すべき自己の行為を全く弁護していないだけでなく、反論すべきお澤の言葉にも全く触れていない。さらに、ここでの話題が与兵衛に対する親の態度であるにもかかわらず、与兵衛への直接的な言及はなく与兵衛の名前すら出てこない。また、(B)は「エ唄酷いぞやさうではない。生立(うまれだち)から親はない。子が年寄っては親と成る。親の始めは皆人の子。子は親の慈悲で立つ親は我が子の孝で立つ。」というきわめて抽象的な訓話めいた話で始まり、その後、自らの葬式のこと話題がとんで、「子は有りながら」縁のない人に葬られるよりは、いっそ行き倒れになる方がましであるという話で終わってしまう。「此の徳兵衛は果報少く今生で人は使はずとも。何時でも相果てし時の葬礼には。他人の野送り百人より。兄弟の男子に先興(ごし) 跡興(か) かれて。天晴れ死光りやらうと思うたに。子は有りながら其の甲斐なく無縁の手に掛らうより。いっそ行倒れの釈迦荷ひが。ましでおじゃるは」。前半はともかく、後半は話がずれたとしか言いようがないほどの飛躍である。と同時に、後半も話の一般性が高く(B)全体が具体性の低い話となっている。ここに指摘した、内容の不自然さ、具体性の低さ、話題の飛躍という(B)の特徴は全て説得力の抑制という点から説明することができる。

まず、具体性の低さから考えてみよう。これは、つづく(C)の具体性の高さを考慮に入れた上で理解すべき特徴である。(C)ではお澤の心情がさまざまな形で語られるが、それらは全て具体性の高い表現で構成されているからである。それではレトリックにおいて、

叙述の抽象度はどのように考察されているのであろうか。叙述の抽象度は、端的には使用される語彙の抽象度として現れる。語彙の抽象度はレトリック研究の中でしばしば取り上げられる話題の一つであり、具体性の高い語のイメージ喚起力が指摘されることが多い。たとえば、アメリカの修辞学者リチャード・ウィーバーは次のように述べている²⁾。

抽象的な語は、適用範囲が広く、明瞭な細部を欠き、感覚的な経験を連想させることがきわめて稀であるといった点で漠然としている。(中略) 具体的な語は、対照的な特性を持ち、ある明確なものに焦点を合わせるという点で厳密である。

ウィーバーは説明の中で、「血」の語を例に具体性の高い語のイメージ喚起力を説明している。イメージ喚起力の違いは、確かに語の抽象度による表現効果を考える上で重要なポイントであろうが、これだけでは(B)における抽象度の高さを十分説明することはできないように思える。抽象度の表現効果にはもう一つの視点がある。その効果を重視しているベルギーの修辞学者カーム・ペレルマンの説に沿いながら説明していきたい。彼は説得における現在感 (presence) という概念の重要性を強調し、現在感を作り出す方法についての考察を行っている。現在感とは、簡単に言えば、物事が聞き手の目の前に存在していると感じさせることである。そして現在感は、叙述内容に重要性を与える、感受性に訴えるなどの点において効果を発揮する。ペレルマンは現在感の重要性を次のように述べている³⁾。

話し手にとっての最優先事の一つは、実際には目の前にないが議論にとって重要と思われるものごとに、言葉の魔法だけで現在感を与えること、また実際に知覚できる要素については、現在感を強めることで、その価値をさらに高めることである。そして、彼は現在感を作り出す主な方法として次の三つを挙げている。ここではポイントのみを簡条書きにして示す⁴⁾。

- (1)長々と述べること。
- (2)細部を詳しく再現すること。
- (3)具体的に述べること。

(1)～(3)には多少の重複もあるが、この中の「(3)具体的に述べること。」がわれわれの問いに答えてくれるであろう。(B)では具体性の低さが現在感を弱める一方、(C)の具体性の高さは(C)の現在感を強める。言ってみれば、抽象度の違いを利用することで(C)にスポットライトを当てる一方、(B)の照明を暗くしているのである。ただし、(B)と(C)の現在感の演出に利用されている要素は抽象度だけではなく「(1)長々と述べること。」も利用されている。一見して分かるとおり、(B)と(C)では長さがかかなり違う。せりふの長さという要素は、確かに修辞技法の範疇には入らないが手軽に説得効果を作り出せる方法であり、たとえばテレビドラマなどでこの方法がしばしば利用され、ドラマの中で特に説得力の要求される「決めぜりふ」の多くは他のせりふよりも長く作られている。

(B)の分析を続けよう。(B)において徳兵衛は、自らの行為を弁護していないと同時に、

与兵衛に対する心情も極めて間接的にしか語っていない。(B)が自己の弁明であり、話題が与兵衛に対する親の態度をめぐるものであることを考えればいずれも奇異なことであるが、これも次の(C)の説得力を高めるための配慮と考えられる。ここで仮に、与兵衛に対する心情を語れば与兵衛に対する愛情を語ることになろうし、自己の行為を弁明すれば金を渡すことは自然な親心であるといった内容になるであろう。ともに次の(C)と重なる内容である。もしも、話の内容が既に誰かによって語られていることであれば、その説得力が半減してしまうことは言うまでもない。二人の話が連続している場合はなおさらである。したがって、(C)の説得力を確保するために(B)ではこれらの話題を選ぶことができない。しかし、このように(B)にいくつもの制限をかしていくと(B)では語るべき内容が無くなってしまう。そこで選択されたのが自らの葬式の話題なのである。アリストテレスは『弁論術』の中で次のように述べている⁵⁾。

聞き手は、感情をこめて語る者には、たとえ彼が何も意味のあることを言わなくても共感を感じる。多くの語り手がただ感情的にわめきたてて聴衆を圧倒しようとするのはそのためである。

(B)は最終的に(C)の説得力に圧倒されなくてはならないが、(B)は徳兵衛の真剣な思いを表現するせりふであるから、(B)にもある程度の説得力と盛り上がりを与えておかなくてはならない。(B)が(A)に対する反論あるいは弁明であることを考えれば、ここで自らの葬式の話をしてはほとんど「意味のあること」とはならないが、徳兵衛が涙ながらに語れる材料として自らの葬式は最適な話題であり、ここで表現される徳兵衛の哀れさ・真剣さは、その内容的妥当性とは無関係に聴衆に「共感を感じ」させるのである。説得力を抑制しながらもこの場にふさわしいせりふを作るという(B)の難しい条件を、近松が高度に練られた修辞で乗り切っていることがお分かりいただけるであろう。

4

(C)に目を移してみよう。お澤は徳兵衛を無理やり引き立てようとした拍子に、懐から五百文の銭を落としてしまう。それは与兵衛に渡してもらおうと考えていた金であり、この「証拠」によって、(A)の厳しい言葉が嘘であったことが瞬時に露見してしまう。お澤はそれまでの強い態度を一変させ、「なう情なや恥しと我が身を掩(おほ)ひ押隠し声を上げ」で徳兵衛に詫び、誇張を伴った感情的な調子で自分の本心を告白する。このせりふが(C)である。

先に述べたとおり、(C)は最大の説得力の要求されるせりふであり、そのためのさまざまな技法・配慮を指摘することができる。(C)の大きな特徴は、話者の感情的高まり・冷静さ、厳しさ・甘さ、という二種の対立的要素が計算された形で配置されていることであり、これらの対比を効果的なものとするためにここでも現在感の操作が行われている。これに加えて、導入部と結末部がレトリックの定石に合致する形で整えられており、これらを総合することで、(C)は(B)を圧倒する強い説得力を有したせりふとなってい

る。冒頭から順に検討していきたい。

(C)の冒頭でお澤はまず次のように自らの非を素直に認め徳兵衛に詫げる。「徳兵衛殿 真平（まっぴら）許して下され。是は内の掛の寄り与兵衛めに遣りたいばかり。わしが五百盗んだ。廿年添ふ中隔心（きやくしん）隔ての有るやうに情ない。」この素直で躊躇のない詫げはお澤の正直さを印象付け、この後のお澤の言葉全てに信憑性を加える。アメリカの修辞学者エドワード・コーベットは文章における導入部の目的を次の二つにまとめている⁶⁾。「(1)聴衆に文章の目的と目標を知らせる、そして(2)聴衆がわれわれの言うことを受け入れる気持ちにさせる。」(C)の冒頭はこの二つの条件を満たしているのである。

ただし、この冒頭ではつづく「廿年添ふ中隔心（きやくしん）隔ての有るやうに情ない。」に注意する必要がある。ここで語られているのは、自らの行為がどのような意味を持ちうるのか、言ってみればその意味付けである。このような判断を示せることは、お澤が自分自身を離れた位置から冷静に眺める余裕を取り戻していることを伝える。特に「二十年添ふ」という形で具体的数字が登場させたことがその効果を高める。この直前にある徳兵衛への詫げ、さらにこの後の与兵衛を思う心情の告白は、ともにお澤の感情の高まりを伴って語られている。感情の高まりを伴った語りの中に冷静さを感じさせるくだりを挿入することは、感情が高まってはいても冷静さを失っていないこと、つまり感情の「勢い」に任せての言葉ではないことを伝え言葉の信憑性を増す。アリストテレスは感情的に「行過ぎ」た文体に対する注意として、冷静さを感じさせる何らかの要素を盛り込むことの必要性を強調し、そのための具体的方法をいくつか挙げている。その中でも次の方法はここでの近松の方法に符合する⁷⁾。

すべての行過ぎ（筆者注：感情的に行き過ぎた文体）に対する救済法は、よくやられる手だが、語り手があらかじめ自分を批判しておくことである。そうすれば語り手は自分のしていることに気付いているのだから、彼の言うことは本当だろうということになる。

「語り手があらかじめ自分を批判しておくこと」として第一にイメージされるのは「今、私は感情的に興奮しているから少々言い過ぎがあるかもしれませんが」といった内容であろうが、語り手が「自分のしていることに気づいている」と感じさせる方法はこれだけではない。上述のような形で「自分のしていること」を冷静に眺めているという態度を示すこともその一つであろう。なお、(C)ではこれ以外にも、「是も女の廻り知恵許して下され徳兵衛殿。」「見苦しい此の恥辱を晒（さら）すも。」といった部分に、自分を外から冷めた目で批判している個所がある。この二つも、感情的な高揚を感じさせる個所に挿入されており、その効果はここで説明した例と同様である。

この冒頭の後は、母親としての愛情を誇張表現を使って語るくだりがつづく。「たとへあの悪人めお談義に聞くやうな。周利槃特（しゆりはんどく）の阿呆でも阿闍世太子（あじやせたいし）の鬼子でも。母の身でなんの憎からう。いかなる悪業悪縁が胎内に宿ってあの通りと思へば。不便さ可愛さは父親（てておや）の一倍なれども。」実の母という立場を前面に押し立てた強力な説得であり、特に「胎内に宿って」の部分は母

という立場を効果的に強調している。さらに、ここでも冷静さのアピールが行われていることに注意すべきである。それは「周利槃特」「阿闍世太子」「悪縁」などの仏語によって行われている。このような仏語は(A)(B)では見られず、(C)でもこの個所だけに集中して見られる。これらの仏語は単にお澤の知識を披露するだけでなく、お澤がここでそのような知識を持ち出せるだけの冷静さを維持していることを感じさせる。つまり、この誇張表現は感情の高まりを表現すると同時に、仏語によって冷静さもあわせて表現しているのである。近松の世話物においては、冷静な見方のできる事が、話者のエトス（弁論によって表現される話者の性格）を形成する要素としてたいへん重視されている。本稿の分析範囲だけでこの点を論証するのは不可能であるが、近松が冷静さを重視していたことを示す用例はいくつも挙げることができる。特に真剣なせりふほど冷静さのアピールが周到かつ丹念に行われる傾向を指摘でき、冷静さのアピールの度合いがせりふの真剣さを計る指標と言えるほどである。この点に関しては既に論じたことがあるので詳しくは拙稿をご参照いただきたい⁸⁾。

(C)の分析に戻ろう。この後、お澤はまず自分が与兵衛にわざと厳しく接してきた理由を語り、次に与兵衛に対する母親らしい優しさや甘さを語る。この時、厳しさの印象が強く残ってしまうことのないよう、ここでも現在感に対する操作が行われている。現在感は次の三つの方法によって表現することができた。

- (1)長々と述べること。
- (2)細部を詳しく再現すること。
- (3)具体的に述べること。

まず自らの厳しさに関しては次のように語られている。「母が可愛い顔しては隔てた心に。あんまり母があいだでないかうばりが強うて。いよいよ心が直らぬとさぞ憎まるるは必定と。わざと憎い顔して打（ぶ）つつ叩いつ追出すの勘当のと。酷（むご）う辛う当りしは継父（ままたて）の此方に。可愛がって貰ひたさ。是も女の廻り知恵許して下され徳兵衛殿。わしに隠してあの銭を遣って下さる心ざし。詞ではけんけん和慥食（けんどん）にいうたれど。心で三度戴きし。」ここで注意すべきは、与兵衛に辛く当たった事実について、その現在感および印象が最小となるよう配慮されている点である。辛く当たった事実は「わざと憎い顔して打つつ叩いつ追出すの勘当のと。酷う辛う当りしは」という形でしか述べられていない。ここでは、現在感を作り出す、長さ・詳しさ・具体性という全ての要素が現在感を小さくするよう計算されている。さらに、この個所は、母親としての配慮や心情を語った中に挟み込まれるように置かれているためほとんど印象を残さない。その一方で、与兵衛に対する甘さ・優しさは次のように語られる。「何を隠さうあいつは立派好きもする奴。取分（とりわけ）祝月鬢附元結（びんつけもとひ）を調べ。人交りもしたからう。生まれて此の方節句節句祝儀欠かぬに此の月ばかり。身祝ひもして遣りたさ。」現在感を作り出す、詳しさ・具体性の要素が現在感を大き

くするように作られており、お澤の母親らしい甘さを印象付ける。(C)を読んでいくと、この「何を隠さう」からのくだりが、テンポあるいは密度感などで、それ以前とは異質の緩やかなものに変化することが気になるが、これは現在感を高めるといふ修辭的要請からきているのである。

いよいよ(C)の最後の部分である。その部分を確認してみよう。「まだ此の上に根性の直る薬には。母が生胆を煎じて飲ませといふ医者あらば。身を八裂も厭はねども。一生夫の銭金文字ひらなか違へぬ身が。子故の闇に迷はされ盗してあらわれた。恥しゅうござるとばかりにてわっと叫入りければ。」ここでもレトリックの定石にみごとに合致した処理が行われている。アリストテレスが弁論の締括りに要求される要素として挙げている四つのポイントを列挙してみよう⁹⁾。

- (1)聞き手に、自分に対する好意を抱かせること。
- (2)話者に有利な事実は誇張し、不利な事実は控えめに見せること。
- (3)感情的に盛り上げること。
- (4)弁論の内容をまとめること。

弁論の締括りは弁論全体の印象に大きく影響するため、内容はもとより、話者のエトス、パトスといった多様な要素から弁論の最後を飾ることが要求されている。そして、(C)の最後の部分は、これら四つの要素をほぼ全て満たしている。まず、必要とあれば自分の身を八つ裂きにして生き胆を飲ませてもかまわないという覚悟は、お澤のエトスを高めると同時に、直接的な自己犠牲の表現が観客の感情に強く訴える。これはアリストテレスの挙げた(1)と(3)の要素を満たす。ロラン・バルトは結末での盛り上げの重要性を次のように述べる¹⁰⁾。

弁論が終わるかどうかが、どのようにしてしるのか。それは、発端と同じく、全く恣意的なものである。したがって、終わりのしるし、結尾のしるしが必要なのである。

(中略) 逆に、何も予感させないこと、何事にも結末のないことは不快である。(中略) ローマでは、結論は、大演技の、弁護士の見せ場だった。両親や子供たちに囲まれた被告の仮面をはぎ、血まみれの短刀、傷口から取り出した骨を見せる。(後略)

上の誇張法はおそらく(C)全体の中で最大の山であるが、これがロラン・バルトが強調した「結尾のしるし」なのである。そしてこの誇張表現の最後「身を八裂も厭はねども。」の逆接は「一生夫の銭金文字ひらなか違へぬ身が。」(一生の間、夫の金は一文びた半銭ごまかしたことの無い自分でありながら)という挿入句をはさんで「子故の闇に迷はされ盗してあらわれた。」につづく。お澤は挿入句の中で自分のエトスを弁護した後、「子故の闇に惑はされ」という理由提示により盗みが魔が差したものであると語る。ここでは「子故の闇」が諺の一部であることに注意する必要がある。『日本古典文学全集』の注では「子故の闇」について「『子ゆへのやみにまよふ』。親は子を思うために理性を失い、分別のつかぬようになる、の意の諺。」と説明している¹¹⁾。「子故の闇」は単なるメタ

ファーではなく諺の一部なのであり、このメタファーは観客に「子ゆへのやみにまよふ」という当時の諺を思い起こさせたに違いない。諺は広く受け入れられた知恵として、聞く者を従わせる強い力を持つ。「ここぞという時に適切な諺（格言）を用いることは、相手を説得する上で大きな威力をもった」¹²⁾。お澤は諺のこの力を利用して自分の行為の一般性を強調し、その罪を小さく感じさせようとしているのである。そして、これらの修辞の組み合わせから読み取れるのは、与兵衛に対する愛情を大きく見せる一方、自らの盗みの罪を小さく見せようというお澤の意図である。これは、アリストテレスが締括りに要求される要素の(2)に挙げている「話者に有利な事実は誇張し、不利な事実は控えめに見せること。」そのものである。さらに、(C)の最後「盗してあらわれた。恥しめござる」はアリストテレスが(4)として挙げている全体のまとめであり、(C)の冒頭とも呼応している。レトリックでは弁論の結末部を重視し、そこにさまざまな要素を要求しているが、(C)の結末部は比較的短い分量の中でレトリックが要求している結末部分の条件をほぼ完璧に満たしているのである。

5

最後に(A)の修辞を検討してみたい。(B) (C)に比べると(A)の修辞はそれほど練り上げられたものではない。作品構成上、特別な説得力が要請されているせりふではないからである。ただし、(A)において近松が配慮した点の一つだけ指摘しておきたい。それは、(C)でのお澤の豹変を効果的なものとするための、お澤を憎々しく感じさせるための配慮である。(A)は内容的には、前半が真意を悟らせないための「とぼけ」、後半が与兵衛にたいする厳しさ・冷たさとなっているが、その全てにおいてお澤の憎々しさが印象付く配慮がほどこされている。

「とぼけ」については特別な技法を使っているわけではない。お澤は、手島屋で夫の徳兵衛を見つけた瞬間、徳兵衛が自分と同じ意図でここを訪れていることにピンときたはずであるが、その意図に気付かない素振りを見せる。「ナウ徳兵衛殿七左衛門様もお留主といひ。内の事はそこそこに。何時逢はうとままの向ひどし。互に忙しい際の夜さ。爰へは何の用が有る悪性する年でもなし。ムウ又与兵衛めが事悔みにか。」長々とわざとらしく考えてみせるところに「とぼけ」が表現されているが、ここでの過度な皮肉な口調は憎々しさを感じさせる。

さらにお澤の憎々しさは、実の子である与兵衛への冷たさ、そして徳兵衛への攻撃によっても表現される。与兵衛への冷たさ・厳しさは「サア勘当といふ一言口を出るがそれ限り。紙子着て川へはまらうが。油塗って火にくばらうが。うぬが三味。悪人めに気を奪はれ。女房や娘は何になれ。」という、具体性の高い誇張法によって語られている。この内容的な強さには説明の必要がないであろうが、ここでは修辞技法の一つ指摘しておきたい。並列されている「川にはまらうが」と「火にくばらうが」を比べると、「川にはまる」よりも「火にくばる」の方がより衝撃的であり、短いながらもここには、後の

方を段階的に強める漸層法（climax）の技法を指摘できる。そして、(A)では漸層法をもう一箇所、徳兵衛への攻撃の中に見出すことができる。「あいつに遣るは淵へ捨つるも同然。其の甘やかしが皆毒餌。」の部分である。こちらでは内容面とともに、形式的にも直喩から隠喩という形でより直接的なものに変化している。野中良三氏は漸層法について「漸層法は比喩法とともに、人を勧誘折伏するに最も効果あるものである。（中略）漸層法が我が説を主張する場合に用ゐて大効があるけれども、他の用ゐるのを聴くに際しては眉に唾して警めねばならない」という五十嵐力の説明を引用した後、「そう言われてみればアジ演説、政治家、香具師やセールスマンの弁舌には漸層法がよく見られる。」と述べている¹³⁾。やや主観的な説明ではあるが、慎重・丁寧な説得ではなく、観客を乗せてしまうような説得に適した技法ということであり、冷静さとは対極の位置にある技法といえよう。そして、五十嵐力が比喩と漸層法が同様の効果をもつと指摘していることも確認していただきたい。与兵衛への冷たさ・徳兵衛への攻撃を誇張して語ることはそのままお澤の憎々しさにつながるが、このせりふは本心を隠した偽りのせりふでもあった。「眉に唾」すべき漸層法は偽りのせりふにまさにふさわしい技法であり、ここにも近松の修辞技法に対する非凡なセンスを見出すことができる。なお、お澤が(C)では自らの冷静さをアピールすることに腐心していること、さらに近松においては真剣な説得ほど話者の冷静さのアピールが丹念に行われることを指摘したが、(A)に冷静さをアピールする配慮を見出すことはできない。偽りのせりふであるとともに憎々しさの演出に配慮した(A)に、冷静さのアピールがないのは当然のことと言えるであろう。

(A)は次のことばで終わっている。「悪人めに気を奪はれ。女房や娘は何になれ。サアサア先に往なしゃれと。」何よりも自分のことを考えるお澤の自己中心的な性格が端的に表現されており、お澤の憎々しさを直接的に感じさせる。そして、これは二つの点で効果的な場所に配置されている。一つは、さきほど指摘した「紙子着て川へはまらうが。油塗って火にくばらうが。うぬが三昧。」という誇張表現の直後に位置している点である。誇張表現による仮想的な盛り上がりがこの表現によって一挙に日常に押し戻されるわけで、この落差が自分しか考えないお澤の性格を鮮やかに印象づける。そしてもう一つは、これが(A)の最後に配されている点である。叙述の順序が内容の印象に影響する「順序のレトリック」という効果を香西秀信氏が指摘している¹⁴⁾。これは最後に配置された内容が他の内容よりも強く印象に残るといふ効果である。(A)の中で最も印象に残る位置に憎々しさを直接感じさせる言葉を配したことは(A)が憎々しさの演出を重視したことの現れといえよう。

本稿は事例研究であるから、本稿の考察だけで『女殺油地獄』全体の修辞技法、さらには近松の修辞技法全体が解明できるものではないが、彼の修辞技法がどのようなものであったのか、その典型的な姿を明らかにできたものと考えている。本稿から明らかなよ

うに、彼は非常に優れたレトリックの使い手であり、彼のテキストを読み解く上でレトリックの視点は不可欠なものであろう。特に、本稿の中で強調してきた話者の冷静さのアピールは、近松を読み解く上での重要な指標になるものと思われる。近松に対するこのような事例研究を重ね、彼の修辭的な癖、さらには彼の修辭技法の全体像を明らかにしていくことが今後の課題である。

注

- 1) テキストは次の文献による。重友毅校注『日本古典文学大系近松淨瑠璃集上』岩波書店、昭和33年
- 2) Richard M. Weaver, *A Rhetoric and Composition Handbook* (New York, 1957) p. 243
- 3) CH. Perelman and L. Olbrechts-Tyteca, tran. J. Wilkinson and P. Weaver, *The New Rhetoric A Treatise on Argumentation* (Notre Dame, 1969) p. 117
- 4) *Ibid.*, pp. 144-147
- 5) アリストテレス、池田美恵訳『弁論術』（『世界古典文学全集アリストテレス』筑摩書店、昭和41年）1408b
- 6) Edward P. J. Corbett, *A Classical Rhetoric for the Modern Student* (New York, 1971) p. 303
- 7) アリストテレス『弁論術』1408b
- 8) 拙稿「近松における修辭的分析の試み—説得力を作り出す技法の解明—」（表現学会『表現研究』第72号、平成12年）
- 9) アリストテレス『弁論術』1419b-1420a
- 10) ロラン・バルト、沢崎浩平訳『旧修辭学』（みすず書房、1979）pp. 133-134
- 11) 鳥越文蔵校注『日本古典文学全集近松門左衛門集二』（小学館、1975）p. 552
- 12) 瀬戸賢一『レトリックの知』（新曜社、1988）p. 109
- 13) 野内良三『レトリック辞典』（国書刊行会、2000）p. 161
- 14) 香西秀信『反論の技術』（明治図書、1995）pp. 46-48

（やなぎさわ ひろや 広島大学教育学研究科・助教授）